# 町人文学としての谷崎文学（五）

## ――谷崎論への一つのアプローチ――

橋本芳一郎

〔前記〕この稿は本誌第十五号（昭和53年3月発行）、第十六号（昭和54年3月発行）、第十七号（昭和55年3月発行）および第十八号（昭和56年3月発行）に掲載したものの続稿で、本編をもって全編完了となるものである。十五号では、最初にこれまで行れてきた谷崎文学論評への代表的なアプローチのいくつかを一瞥した後、私なりの異なったアプローチを試みようとして、私なりにその体験などに照らして、町人精神といわれるものの概念を規定し、初期作品のうちから、「象」「刺青」「少年」「幇間」「人魚の嘆き」などの諸短編について、十六号では「神童」「異端者の悲しみ」の自伝的特徴の濃いものと、主として経済生活を取り扱った「小さな王国」、十七号では作者の関西移住に伴って、舞台も関西に移り、また、その後期の日本への回帰といわれる諸作品中、まず「蘆刈」を、十八号では「春琴抄」を取りあげ、その町人文学といってよい、本質について検討してきたものである。

### 二十二

「猫と庄造と二人のをんな」は昭和十一年の一月号と七月号の「改造」に分載された中編小説で、谷崎文学のうち、次の三つの意味での異色作である。

(1) 庄造という中年男の熱愛が、その先妻の品子や現在の妻の福子などの女性に向かうことなく、愛猫のリ、ーという動物に注がれる話であること。

(2) 舞台は阪神間ではあるが、蘆屋の旧街道筋とか、六甲とかの陋巷であり、そこに住む荒物屋、畳屋、女中上りの和裁仕立女、ラジオ屋などが主な人物で、このころの谷崎の上流憧憬とはうらはらに、下流の庶民生活がユーモラスに描かれていること。

(3) 筆致が終始写実的で、結末も「蘆刈」「春琴抄」のように、ロマンチックな大団円はなく、さてこれから、庄造、リ、ー、品子、福子の四角関係は、一悶着が起こりそうだというところで話は打ち切られ、自然主義的であるが、余韻のある結びとなっていること。

この作品が読者に与える強い印象は、およそ二つのものがあると

思われる。第一は、庄造とリ、ーとの間の観察の細かく行き届いた官能的な愛撫や愛情で、リ、ーに爪で引っかかれても、怒るどころか却って喜ぶ庄造のマゾヒズムの匂い、互いに床の中で放屁さえ嗅ぎ合うという糞尿趣好（スカトロジー）さえ交えた谷崎的愛撫であること。この特異性に加えて、第二には猫だけが真実の愛情で庄造に接してくれることを知る庄造が、その生活力の無能さから母や妻たちから軽んじられていることを通して、人間たちの愛情というものの中に含まれる打算やエゴイズムが浮き彫りにされ、その人間のなまの姿が、どんな読者をも打たずにはおかない真実を語っていることである。伊藤整をして「これはリアリズム小説でありながら、本質的に一種の思想小説となってゐる。」（昭33・4、新書判「谷崎潤一郎全集第二十三巻」解説）といわせた、質高いリアリズムのまことに巧妙な描写力である。

ところで、この稿のテーマは、先に挙げた三つの特色のうちでは、第二の庶民世界の出来ごと、その文学性としては、これも第二の人間のエゴイズムの描出に主として関わることなので、この二点にだけ絞って、少しく考察してみようと思う。

そもそも、庄造が先妻の品子と別れさせられ、いとこの福子と結婚したことが、母のおりんの打算と策謀から出発する。彼女は、さびれていく蘆屋の旧街道に荒物屋渡世をしているが、商売の前途は暗い。一人息子の庄造はそんなことには呑気な生れつきで、貧乏を苦にしない代りには一向に商売に身を入れない。十三四のころ、夜学へ通いながら西宮の銀行の給仕に雇われ、その後、青木（あおぎ）のゴルフ練習場のキャディー、年ごろになってからはコック見習になったりしたが、どれも長つづきしないで怠けているうちに父親がなくなって荒物屋の亭主に納まってしまった。二十六歳に畳屋の塚本を仲人に立てて、山蘆屋に邸奉公をしていた品子を嫁にもらったが、その時分から商売の方はいよいよ上ったりになって、地代も二年近く滞って、その返済の見込みも立たない。ぐうたら者の庄造をアテにしないことに決めた品子は、仕立物を頼まれて暮しの補いをつけていたばかりか、せっかくお給金を溜めて一通り拵えて来た荷物にさえ手をつけて、わずかの間に減らしてしまった。

こういう品子に、子種のないということを難癖をつけるよい口実に、追い出してしまったおりんには別の打算があった。彼女の兄が今津に小さな工場を持って菓子の製造販売をしており、五六軒も家作を持って裕福に暮らしていたのだが、そこに福子という父親に手を焼かせている娘がある。母親を早く亡くしたせいもあるが、女学校は二年で中途退学、二度も家出をしたことがあって、神戸の新聞にすっぱ抜かれたりしたものだから、縁付けようと思ってもなかなか貰い手がないし、自分も窮屈な家庭などへは行きたがっていない。父親は何とか早く身を固めさせなければと焦っているが、そこへ目をつけたのがおりんであった。福子は品行の悪いのは困るけれど、気心はよくわかっているし、亭主を持ったらまさか浮気をすることもあるまい、それよりなにより、この娘には国道に家作が二軒付いていて、そこから上る家賃が六十三円（現在にすると十余万円位に当たろうか）になる。父親がそれを福子の名義にしたのが二年も前のことだから、その積立が元金だけでも千五百十二円ある、それを持参金に持ってくる上に、月々六十三円が入るとすると、それ

らを銀行に預けておいたら、十年もすれば一と財産ができる。自分は老い先の短い体であるから欲ばったところで仕方がないが、甲斐性なしの庄造の将来の生活を考えると、安心して死んで行けないのだった。

このおりんと兄とが心を合わせて、庄造と福子とを近づかせ、甲子園の野球だの、海水浴だの、阪神パークだのへ遊びに出す算段をめぐらせたので、子供っぽく気立てのやさしいので女好きのする庄造と、福子が妙な仲になってしまったというわけである。すべて金銭ずくのおりんに糸を引かれての、無節操な庶民世界の出来ごとであってみれば、こう書いただけで、この作品の底に流れる町人性はもう改めて指摘する必要もなかろう。

そしてもう一つ、踏まれても叩かれても、やがて庄造を自分のもとに取り戻してみせるという信念で、深慮遠謀、不屈の執念を燃やして、独力で生き抜こうとする品子の生活力のしぶとさが加わるのである。――潤一郎自身がその芸術に対してそうであったように、どんな境遇にあろうが、困難に会おうが、己が城をしっかりと守って、独力で掛け引き巧みに図太く生き抜くのが、町人、とくに商人精神というものである。

そもそもこの話の発端は、敗者の品子が勝者の福子に対し、哀れっぽく自分の寂しい境涯を訴えて、リ、ーが欲しいから、くれてくれろという手紙からはじまるのである。福子は初め品子の深だくみに気づかず、とかく猫と戯れることに熱心で、自分をさえおろそかにする庄造を見ると、品子がそうであったようにやがて庄造から猫以下に見られることになるかもしれないと、手紙の文句に唆かされるまま、庄造からリ、ーを離してしまえと、そこは物持ち嫁の強さ、庄造に命令的に承知させ、畳屋の塚本を使いとして、リ、ーを妹夫婦の二階借りして仕立て物で生計を立てている品子のもとへやらせてしまう。

それからの品子のリ、ーの手なづけ方は、庄造とり戻したさの女の一念というほかはない。もともと庄造と一緒の時代はリ、ーを夫婦間の邪魔物と思っていた女なのだが、今度はなかなかなついて来ないリ、ーを、身分不相応の贅沢な食物を与え、とうとう庄造と同じように、この老猫と同衾するまでに手なづけてしまう。そして物語の結末は、品子に会うことはうとましいが、リ、ー恋しさの一心で、庄造が福子の目を盗んで、リ、ーのお馳走を用意し、品子の家近くに忍び寄り、葛の葉の茂みに身を隠して、リ、ーの出て来るのを待ったが、それは不成功、とうとうまたの日には、品子のほんのちょっとの外出の隙をねらって、その家にまで現われて、妹の初子のお情の手引きで、品子の部屋でリ、ーに再会するまでに発展する。

品子の思惑が成功の緒を示したところでこの小説は終わりとなる。それにしても彼女のなんと強い執念であることか、「商売(あきない)の道は飽(あ)きないの道」と、私などは少年のころから教育されている。再びくりかえすが、品子の脇目もふらぬ一途な執念の強さこそ、潤一郎の己が文学に対する執念の強さの分身、懐疑派のインテリなどとは異質の、生得の彼の町人魂によるものと見ることは、こじつけに過ぎるとは言ってもらいたくないのである。

前にも述べたが、この作の成功の第一の原因は猫と人間に対する観察の細かさからくる写実の妙にある。猫についていえば、「猫―

マイペット」（昭5・1）など彼の談話筆記や身辺の人々が語っている、当時の彼の猫好きと、その飼育のおのずからの現れである。また、庶民世界生活や感情について言えば、「同窓の人々」（昭21・12）や発表書簡やその他が語っているように、佐藤春夫一人の例外を除いて、彼は文学者との付き合いを好まず、生涯親しかった友人は、一高英法科での親友津島寿一をはじめ多くは官界や実業界の人、とくに幼少からの竹馬の友でもあり生涯の恩人でもあった笹沼源之助などは東京高工（現、東京工大）出身の実業家、それに作品を除いて今のところ文献的には余り現れていないが、彼が中晩年に好んで付き合ったのは、文学のブの字も知らぬ、町の料理人とか職人とか、そういう庶民たちであったそうである。（注1）潤一郎とは名もない庶民を身近かに感じえる人だったのである。

因みに私が見たいくつかの潤一郎作品の映画化は、そのほとんどが原作の味を傷つけるものばかりのようだったが、唯一の例外として、あるいは原作以上のおもしろ味の出た傑作として豊田四郎監督の「猫と庄造と二人のをんな」（昭31東京映画作品）がある。もとよりその成功の多くは、八住利雄の脚色、豊田監督の演出や、庄造役の森繁久弥、品子の山田五十鈴、おりんの浪花千枝子、塚本の芦屋雁之助など、大阪系または大阪人を演じて巧みな名優たちの演技にもあったことだが、原作の持つ庶民性日常性のリアリズムと、人間観察の絶妙さからくる〝人間喜劇〟であったところが、映画の大衆性とよくマッチしたところにもあったのだろうと思う。

（注1）「谷崎潤一郎の世界」（昭54・9）の著者、稲沢秀夫氏は、いまこういう彼が好んで交際した人々を、松子未亡人から紹介していただいて、その聞き書きを集められているとのことである。

## 二十三

「細雪」は周知のように、「中央公論」の昭和十八年一月号に第一回を発表、三月号に、その第二回が出たところで、時局に合わないものとして当局から連載を禁止され、その後、太平洋戦争の激化に伴い、作者は阪神間の魚崎から十九年四月には熱海市の西山に疎開して密かに執筆を進め、七月には上巻二百部を限定自費出版して、友人知己に頒布した。十二月には中巻を脱稿したが、当局の干渉で印刷頒布を禁じられた。その後二十年の五月になると、家族を伴い岡山県津山市や勝山町へと戦火を避けたが、その年の八月十五日に終戦を迎えると、二十一年三月には京都に転居、二十二年二月にはその中巻を中央公論社から出版、下巻を「婦人公論」に同三月から連載し翌二十三年十月号で完結、同十二月に下巻が中央公論社から出版されたものである。

初発表の十八年というと、作者は数えで五十八歳、十三年九月に準備と執筆に五年の歳月を打ちこんだ源氏物語の翻訳を完成した後の、久しぶりの大仕事で、三巻を通じて枚数は千五百枚以上にも及ぶ大長編で、蘆屋の高級住宅地に住むもと船場の豪商蒔岡家の次女、幸子（さちこ）の家庭を中心に、姉の鶴子、妹の雪子と妙子の四姉妹の生活と運命とを描いた写実小説である。この作が世に出ると、追いかけるようにして毎日出版文化賞、朝日文化賞に飾られ、やがて二十

四年十一月には作者も数えで六十四歳の時第八回文化勲章を受けることになり、この作品は対社会的には最も著名な作者の代表作となった。

物語が展開される歳月は昭和十一年十一月の雪子の瀬越との見合いに始まり、十六年四月末、彼女が御牧との縁談成立、挙式のための上京の車中で終わる。十一年といえば二月二十六日には二・二六事件が起こり、翌十二年の七月には日華事変が勃発し、そして十六年は十二月初にそれがとうとう太平洋戦争へと突入した年で、それが日本の国運と国民の生活や運命にどう関っていった世相であったかということは、ここで私が改めて書く必要もないことであろう。

さて、こういう時代に、この一家がどのような生活を送ったかということが、本論の主題であるが、いろいろの点から蒔岡分家の主人貞之助のモデルと思われる作者谷崎潤一郎のなまの人間としての当時の時局観というものは興味あることなので、まず、その点から触れていくことにしよう。自ら押しかけ弟子と名乗って、中年時代の谷崎一家と深く関わった今東光が、その晩年、雑誌「噂」の編集記者の質問に答えた文壇人の追憶をまとめた『文壇毒舌史』（昭和48・6）という愉快な書物がある。

とうぜん潤一郎やその先夫人千代さんのことなどが、この著の多くのページを占めるが、その中に次のような話がある。

――潤一郎の長女鮎子さんの夫で、佐藤春夫の甥に当たる竹田龍児氏は大学で元史を勉強した人なのだが、中国に一度も行っていないので、今東光が華北交通の宇佐美莞爾総裁に頼んで同社に入れてもらった。そのうち十二年の七月には蘆溝橋事件などが起こって日中の関係は状況が苛烈になる。谷崎は娘や婿になにかあっては大変と、ウロチョロして東光になんとかしろという。春夫は「国家のためだ。北京に踏みとどまらせろ、帰すな。」という。千代夫人は「もう辞めさせて帰国させて欲しい。」という。そこで、千代夫人が入院中の牛込の個人病院で、東光を加えて四人の家族会議となった。これが潤一郎と千代には離婚後、たった一回の行き来だったそうだが。……

谷崎はせっかく入れてもらったが「義理人情の話ではない。命にかかわることだから、もうやめさせてもらおう。」という。佐藤は積極的戦争論者で愛国者なのでガンとして反対、「戦にいくか、そうでなければ、こういうところで死ぬのが当然である。」との意見。千代夫人は夫の春夫の手前なんともいえない。そこで仲介者の東光の採決ということになり、「いまからすぐ総裁に話をして、やめてすぐ引揚げさせます。」と決着をつける。そして佐藤に「分かってくれ」というと「ウム」と苦虫をかみつぶしたような顔。龍児氏は引き上げていま大学で歴史学の教授になっているが、昭和十六年ごろの話で、アメリカが日本の資産凍結をして両国関係はいよいよ険悪になっていく。谷崎にはこれは大変なことになるという情勢判断があったのだろうと、東光はつけ加えている。次に少しその後の記者と東光との対談を原文のまま引用させてもらうと、

（記者）――谷崎先生というのは、軍部とか国家のためということはあまり言わないですか？

（今）――軍部は大っきらいだもの。官僚はきらいだしね。戦争なんていうのもブルブルもので、きらっていました。だから、その

ときも、谷崎先生と別れた後で、佐藤さんが「谷崎は、あれは〝素っ町人〟だね。武士でもないし、御家人でもない。町人でもないね。〝素〟がつくね。なんだ、今日の話は、実に臆病な話だ。……（云々）」

といって、せっかく骨折って入れてもらいながらと、佐藤は怒っている。記者が、谷崎先生には服装なんかもそういう感じがありましたね、というのに答えて、

（今）――そうですよ。特に晩年などは、要するに江戸の下町の大商家の旦那の面影がありましたね。

これは以前からそうでしたが、正月になりますと、暮からちゃんと餅をつきまして、鏡餅を供える。それで、家じゅうを引き連れて神社に行って、元日に太太神楽をあげるんだよ。「今年も……」なんて、ちゃんと拝んでもらってね。二月には節分で十二月のすす払いも昔からのしきたりどおりにちゃんとやりましてね。そういう江戸時代の一年じゅうの行事を踏襲してました。いつどこまでいっても、町人だったんですね。

さて、以上で「細雪」を書くころの作者の心境と生活態度とはおよそ想像がつく。次には作品の舞台の問題である。

「細雪」を書くころ、潤一郎は現在の神戸市東灘区住吉町反高林のいわゆる「倚松庵」に、松子夫人、その妹の重子さん、信子さん、夫人の先夫との間の連れ子で潤一郎が次女として養子縁組をした恵美子ちゃんと五人家族を構成していた。家は住吉川沿いの庭に老松が高くそびえる古風なやや大きな和風瓦葺の二階で、今も昔のままの姿で児島悠輔という方の住居として残っているが、作品で蒔岡一家の住居と設定したのはこの家ではない。場所は阪急電鉄の芦屋川駅を北に行った所となっているが、実際の家としては、今の芦谷市三条町にある松子夫人の知人、二人の頼まれ仲人の木場悦熊氏宅だったそうである。（野村尚吾「谷崎潤一郎風土と文学」（前出）による。）

ところで蒔岡家の階級であるが、潤一郎自身は〝関西の上流中流の人々〟（昭23・11『『細雪』回顧』）と書いたり、その東京に移住した銀行の支店長夫人、貸家住いの長姉の鶴子については〝中流階級〟（上巻、二十一）と書いたりしているが、伊藤整は総体に〝中流の上〟（昭33・12新書判「谷崎潤一郎全集第二十四巻・細雪上巻」解説）、山本健吉もこれと同じ見方（昭25・11『『細雪』の褒貶』）をし、折口信夫氏は〝ぶち・ぶるじょわ〟（小金持）または〝中流〟（昭24・1『『細雪』の女』）と呼んでいる。私は四年前、「倚松庵」や木場氏宅跡などを見てきているが、木場氏宅のあるあたりは、甲南女子大に遠くない、六甲山麓で市街地から坂道を少し登ったあたりの小高い所で、木立の多い閑静な一級住宅地であるが、その辺にある住宅はみな外から眺めた印象では、東京でいえば、田園調布あたりによく見かける、まずは、中流の上という位の構えである。幸子の夫、貞之助は大阪に自分の事務所を持ってそこへ通う計理士であってみれば、その社会的地位から措しても、決して〝上流階級〟というようなものではなかろう。ただ、作品中でのこの一家の贅沢な生活ぶりは、作品中の他の家庭の堅実な中流階級のやり方を越えており、これは潤一郎の流行作家としての潤沢な収入と派手好みからきたモデルたちの実生活の写実であるからであろう。

## 二十四

さて、この作品の読みどころであるが、伊藤整が前出の新書判全集の解説で、次の三つのものをあげているが、私には最も妥当な指摘のように思われるので、その要点をまず紹介してみよう。

≪一、人間が姉妹として、夫婦として、また親子として生きるとき、その家族や親戚の間で、どのやうに性格や愛情や理窟や義理や金力や言葉使ひが形成されるものであるかといふこと。即ち日本の社会で、一組みの人間関係の間に働く力はどのやうなものであるか、といふことの理解による感動である。（下略）

二、同時に、特にこの作品では、現代の日本での美しい生活、美しい女性といふものの、生きる内容と外形がよく描かれてゐるので、我々が若し、中流の上位の財力と容貌と教養とを持つて生き得るとすれば、どのやうな美しい日常生活が可能であるか、といふ一つの理想的な生の姿を、よく知り味ふことが出来る。……≫とし、現代風で、同時に不幸な生活に落ちてゆく妙子は、主として他の人物の美しさを引き立てるように使われていると見る。

≪第三、もう一つは、中心人物の雪子の与へる特殊な効果である。≫とあげ、彼女は三十過ぎても二十三四に見えるやうな、一種の永遠な美しさを保ち、何人もの男に好かれ、見合いを重ねるのにいつまでも結婚できない。読者はこの不幸をいとほしみながら、実は永遠にこの女性が男の占有物としての意味での妻とならないこと、その永遠に無比の美しさを保っていることを望んで物語を追っていく。

≪その気持は、我々の伝説に、「竹取物語」のかぐや姫、小野の小町を生み出させたところの、永遠の無垢の美女の実在を願ふ気持である。≫と、この第三のものを人間性に最も深く根ざした願いとしてもっとも強い魅力だとして、これを単なる一家族の写実小説から抜け出しているものと見る。

第二のものについては中村真一郎もその「『細雪』をめぐりて」（昭25・5「文芸」）でこの作を同じような意味で一種の理想小説と呼んだものであり、その理想とは作者の資質、人物・題材どこからいっても町人の理想で、私のこの稿のテーマは主としてこの第二のものと、それと密接にからみ合う第一のものとに関連するので、そういう角度から、とくにその特徴の著しいところを、順を追って読みとっていくことで、この大作の分析と、長くつづいた拙論の終結部とすることにしよう。

ところで、蒔岡一家は昔風の意味での町人でも商人でもない。上巻の「二」で説明されていることだが、その家が全盛であったのは大正の末期までで、姉妹たちは母を早く失い、長女の鶴子の夫の辰雄を養子に迎えて家督を譲っていたのだが、辰雄は義父が死ぬとまもなく営業も縮少、やがては旧幕時代から由緒を誇る船場の店舗も家来筋に当る同業の男に譲り、自分は元の勤めの銀行員となり、居も上本町九丁目に移して純粋のサラリーマンとなった。次女の幸子には分家させ、その夫の貞之助は阪急蘆屋川に住み、そこから毎日、大阪の事務所に通う計理士で、義父から分けてもらった多少の資産で生活の補いをつけている一家である。医者や弁護士と同様、知識人の営む独立の自由業であるが、いわゆる町人の営む商店とは異

質である。貞之助は商大出に似合わず文学趣味もあり、和歌なども作るとされているが、これは一家の風流趣味を導く伏線で、計理士という仕事自身は、医者、弁護士などと異なり、日々金銭にかかわるもっとも商人的な知識業である。しかも四姉妹のすべてが、船場の古い大商店の娘として生い立っているのだから、舞台である貞之助一家の生活や意識が大阪商人の現代版であることは自然のなりゆきである。

ただ一つの違いは、昔の商店は営業の店と家族の住いとが同一の場所で、労働と消費とが一体となっていたが、このような現代の家庭生活では、女性たちは家事のとりしきりと消費面とにだけ関係するので、主人に高収入があり生活に苦労のないかぎり、世の荒波に直接にはさらされない。耽美主義者谷崎潤一郎描くところの家庭小説としては、こういう現代的生活様式こそ、かえってその本領を発揮するのに恰好なものだったともいえるのだろう。

蒔岡姉妹の普通のサラリーマンとの違いは、まず、作品の冒頭、上巻の「一」の雪子の見合いの相手、瀬越に対する幸子の説明と妙子のそれに対する品定めの場面での、姉妹の意識やことばに最初から表われてくる。三姉妹で個人宅での名匠のピアノの演奏会に招かれて行く前の身揺えで、妙子が幸子の肉づきのよい襟頸から両肩へとお白粉を引いてやりながらの会話である。

「サラリーマンやねん、MB化学工業会社の社員やて。――」

という雪子の見合いの相手に関する幸子の話しかけに対し、

「なんぼぐらゐもろてるのん」

と妙子がまずいうことばはこれである。だれしも、結婚相手の男性の生活力を問題にするのは当然であるが、まずそれに関する最初の質問が、学歴であったり、会社のランクであったりする人は、これはその道に詳しいインテリやサラリーマン階級というところだろう。ところが、そんなことは抜きで、いきなり収入の金額を聞く妙子は、まず金銭をもって人の価値を量るので、現代娘というところだろうが、その根はやはり大阪商人の娘である。会社の内容はむしろ妙子の方がよく知っており、月収や学歴などは幸子の口から説明された後、次の妙子の質問は「財産」である。

これに対する幸子の答は、田舎の母親が一人住んでいる昔の家屋敷と、年賦で買った六甲の小さな家と土地があるだけで、「まあ知れたもんやわ」と軽蔑的であるのも、同じ育ちのその姉らしい。次に妙子が幸子に男の写真を見せてもらっての感想は、

「これやったらまあ平凡や。――いや、いくらかえゝ男の方か知らん。――けどどう見てもサラリーマンタイプやなあ」

である。こう一部を抜きだしたのではよくわからないが、妹の妙子の方がより即物的、姉の幸子の方が年嵩だけにもっと円満で常識的である性格の書き分けも簡潔な会話の中に巧妙になされていて、そして「二」の章では妙子が人形造りに才能を表わすことなども書かれるが、彼女たちはともにサラリーマンを自分たちと同属の階級とは意識していない。そして妙子は幸子に頼まれ、彼女が脚気予防のためにするヴィタミンBの注射の注射器を、女中に命じて持って来させる時、「御寮人(ごれうん)さん注射しやはるで。」と、商家の主婦の古風な呼び方をするのである。

雪子とてまた同様である。四の章では自分が縁遠いところから、

結婚相手の条件として、初めは初婚を望んでいたが、次第に二度目でもになり、次には子供があっても二人までなら、年も貞之助より一つや二つ上でも外見が老けてさえいなければ、……と譲歩して行っても、最後の条件は大した財産は要らないにしても、老後の生活を保証するだけの用意があることが望ましいといっていると描かれる。

ただ、妙子だけが、家柄や財産、収入よりも本人の愛情や男性的魅力という点を選んで、船場の老舗、奥畑商店のぼんぼんの啓坊（かつての恋の過ちの相手）を袖にして、中巻に見事な描写で描かれている、昭和十三年の阪神間大洪水の時、決死の勇で自分を死地から救い出してくれた、岡山在の貧農の伜で、奥畑商店の元の店員で、今は写真師になっている板倉と恋仲になってしまう、現代娘として設定されていることを除いては、夫の転勤に伴って東京へ出て借家住いをする長女の鶴子にしろ、幸子・貞之助夫婦、そしてご当人の雪子と、――一族が、雪子の見合いの相手として次々に現われてくる、瀬越・野村・橋寺・御牧などの初婚や再婚の男性たちに対し、まず、評価の基準となるのが、その家柄（貴族階級などというのではなく、豪商とか素封家とかいう金銭的意味での）や財産、当人の収入などで、それに伴うそれらしい人柄が次にくる。

## 二十五

これに関しして、読者が気づいていかねばならないことに、この一族、とくに主人公格の幸子夫婦のブルジョアらしい一級好み――あるいは成金趣味といってもよいものがある。

彼らが雪子の見合いのための待ち合わせ場所としては、それが阪神間なら、まず、神戸のオリエンタルホテル（明治三十一年、明治天皇が御来遊の折、屋上から港まつりをご覧になった御宿舎、改築されて現存）のロビーでなければならず、それが都合によってまずい時にはトーアホテル（現存せぬ由）となる。この趣味は中巻で姉夫婦が管理している妙子への父の遺産の件で、幸子が妙子を伴って上京した時にも遺憾なく発揮される。その宿は先代の父が上京の際の定宿の築地の浜屋で、三人が落ち合う場所も、渋谷の道玄坂の安普請で子供がうようよいる鶴子の借家などではなく、銀座のニュウグランド（現在の大衆向きの映画館や居酒屋などは戦後作られたもの）かローマイヤアであり、丸ビル（当時は日本一の高層ビルディング）のプレイガイドで切符を取って歌舞伎座で歌舞伎（出し物の一部だけで俳優は書いてないが、もし事実が許せば、作者潤一郎が大好きで、作品では同優が関西に来れば彼女らが必ず見ることになっている六代目菊五郎としたかったところだろう）を見る。上京と下阪には必ず寝台車利用で「かもめ」の切符を人に命じて用意させる。

――こう書いたところで、現代の若い読者にはそれほどの感興は湧かないだろうが、この昭和十四年の春のころは、銀座は日本の代表的な盛り場としてその最盛期の終わりごろで、銀座八丁、その裏通りに入れば、バー、カフエー、小料理屋など、赤い灯、青い灯のネオンの海で、大通りまた、しゃれた喫茶店や大カフエー、レストランが軒を並べていた。……そして時折りは、さらに裏通りを、軍

歌の声やバンザイの声に送られて、日華事変に赴いて行く、出征兵士と見送り人の行列も通った。……このころを東京で過ごした私のような老読者には、世相に関らぬ、彼女らのブルジョア趣味がよく実感されてくるのである。

ここまで書いてくると、作者潤一郎が自信を持って――あるいはふてぶてしく居直った形で――、「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。」といった兼好法師のひねくれ趣味や、芭蕉などの閑寂味を退け、源氏や西鶴の豪華趣味、――俗人たちの〝月並の美学〟とでもいってよいブルジョア(資本主義下の現代の新貴族)趣味を堂々と打ち出そうとしている意図が読みとれてくる。その最も典型的な一章として、上巻の幸子一家の年中行事、平安神宮の枝垂桜を打ち上げとする、京都への花見行にからんでの十九の章の幸子の述懐をあげてみよう。

≪幸子(さち)は昔、貞之助と新婚旅行に行つた時に、箱根の旅館で食ひ物の好き嫌ひの話が出、君は魚では何が一番好きかと聞かれたので、「鯛やわ」と答へて貞之助に可笑しがられたことがあつた。貞之助が笑つたのは、鯛とはあまり月並過ぎるからであつたが、しかし彼女の説に依ると、形から云つても、味から云つても、鯛こそは最も日本的なる魚であり、鯛を好かない日本人は日本人らしくないのであつた。彼女のさう云ふ心の中には、自分の生れた上方こそは、日本で鯛の最も美味な地方、――従つて、日本の中でも最も日本的な地方であると云ふ誇りが潜んでゐるのであつたが、同様に彼女は、花では何が一番好きかと問はれゝば、躊躇なく桜と答へるのであつた。古今集の昔から、何百首何千首となくある桜の花に関する歌、――古人の多くが花の開くのを待ちこがれ、花の散るのを愛惜して、繰り返し〳〵一つことを詠んでゐる数々の歌、――少女の時分にはそれらの歌を、何と云ふ月並なと思ひながら無感動に読み過して来た彼女であるが、年を取るにつれて、昔の人の花を待ち、花を惜しむ心が、決してたゞの言葉の上の「風流がり」ではないことが、わが身に沁みて分るやうになつた。そして毎年春が来ると、夫や娘や妹たちを誘つて京都へ花を見に行くことを、こゝ数年来欠かしたことがなかつたので、いつからともなくそれが一つの行事のやうになつてゐた。此の行事には、貞之助と悦子とは仕事や学校の方の都合で欠席したことがあるけれども、幸子、雪子、妙子の三姉妹の顔が揃はなかつたことは一度もなく、幸子としては、散る花を惜しむと共に、妹たちの娘時代を惜しむ心も加はつてゐたので、来る年毎に、口にこそ出さね、少くとも雪子と一緒に花を見るのは、今年が最後ではあるまいかと思ひ〳〵した。≫

とあり、しかも幸子は鯛でも明石鯛(うま)でなければ旨がらないし、花も京都の花でなければ見たような気がしないのであり、花見の常例としては、土曜日の午後から出かけて、南禅寺の瓢亭(人も知る京都一の普茶料理)で早めに夜食をしたため都踊を見物してから祇園の夜桜を見、その晩は麩屋町の旅館に泊って、翌日、嵯峨から嵐山へ行き、中の島の掛茶屋あたりで持ってきた弁当の折を開き、午後には市中に戻って平安神宮の神苑の紅枝垂を見るという、まるで一泊京洛観桜豪華コースとでもいったようなことを毎年くりかえす。

この一家は住居、食物、風光のすべてが関西でなければならない

人々であるが、山だけは関東に譲って、上京の行き帰りには富士山を見る楽しみを忘れない。――食い物は鯛、花は桜、山は富士、……これが「細雪」が描くところの日本美の象徴なのであり、〝月並〟と笑わば笑え、〝俗流〟と貶さば貶せ、――と、東西の美味求真を極めた老耽美主義者の潤一郎が、これらの美女たちの裏に居直っているような風がある。

この月並趣味は、貞之助・幸子夫妻の対世間の生活態度にも現われる。ことばを換えていえば、真のモラルよりも豪商の子女という世間体を大切にし、他人に非難されることのないように、また、家族や他人の心持ちを傷つけないように賢明に配慮しながら、程よく周囲と調和しながら日常事を処理して、自分たち一家の幸福を守ろうとする態度である。全編がこういう常識性をもって、雪子の見合いの手順も、その結果の断り方も断られた時の処置も、妙子の世を憚る妊娠の後始末もなされるので、一々の例挙は避けるが、これまでも何回も指摘してきたように、このエゴイズムに根をすえた現実主義や社交性は町人のものである。しかも彼らは奮闘努力して財を築く一代目ではなく、それを守っていく二代目で、加えて婿の貞之助は商大（現、一橋大か神戸大）出のインテリで、文学趣味などもあるとなっているから、貞之助が花見の後で腰折れ短歌を一首認めると、幸子もそれに和して一首まねごとを詠んでみたり、また、一家は山村流の老師匠をまねいて山村舞を習って、妙子などは大阪の三越ホールの温習会にも出場するという具合で、雛祭り、月見の宴も忘れぬというあたり、当時の一般サラリーマンの生活とはやや異なり、古風な富商の家の風流ぶりも引き継いでいる。また、下巻に出てくる製薬会社の重役の橋寺医博と雪子の縁談など、今までにない良縁と喜びながら、結局、雪子の因循な性格から橋寺を怒らせてしまうが、その後始末としての貞之助の詫び状や、それに対する橋寺の返書の文言、幸子や橋寺の事後の贈り物の交換など、中年の一流実業家とはこういうものかと、その教養や行き届いた礼節ぶりなどは、これは英国商人風の常識（コモンセンス）よりも、むしろフランス流の良識（ボン・サンス）のほうに近いような処世法とも思われる。

女たちは、第二次世界大戦が刻々と進んでいく世界情勢にも、日中の戦争に深入りしていく日本の世相にも、いっこうに風馬牛で、やれ見合いにやれ衣裳にと浮身をやつすだけであるが、さすが男の貞之助は世の実業家並みの認識と関心は示す。上巻の十七の章、妙子を通じて知り合った、上海から来たという白系露人キリレンコの家に招かれて、ロシア料理のご馳走になりに行く場面があるが、そこの「お婆ちゃん」が日本で安穏な生活が出来るのは「天皇陛下のお蔭」と感謝し、主人のキリレンコが共産主義に対して最後まで闘うものは日本であるといい、中国の共産主義化を恐れ、去年の十二月、張学良が蔣介石を捕虜にし、しかも命だけは助けた西安（シーアン）事件について、貞之助に意見を求めると、彼は、「さあ、……何か、新聞に書いてあつたゞけではなさゝうな気がしますけれども、……」

とことばを濁して何の意見も述べない。そして作者は、自分の分身と思われるこの中年紳士の気持ちを次のように書く。

《貞之助は政治問題の中でも国際間の出来事に関しては相当に興味を感じてをり、新聞や雑誌に書いてある程度の知識は持つてゐるのであるが、どんな時にも決して傍観者の態度から一歩も出たことは

なく、時節柄、うつかりしたことを口走つて係り合ひになつては詰まらぬと云ふ警戒心が強いので、取り分け気心の知れない外国人の前などでは、何も意見を云はないことに極めてゐた。≫

その貞之助も同じく二十四の章になると、一人娘の悦子が子供ながらに神経衰弱になっているのを憂えて、

≪近頃は、目下の支那事変の発展次第では婦人が銃後の任務に服するやうな時期も有り得べく、そんな場合を考へると、これからの女子は剛健に育てて置かなければ物の役に立たないと云ふことを、憂慮するやうになつてゐた。≫

と書かれるが、貞之助の時局対処はこういう自分本位、家族本位のエゴイズムからだけ出ているのであり、これまでも何回か書いてきたような町人根性そのもので、良かれ悪しかれ、当時の国を憂える志士仁人のものでもなければ、また軍部やそれに迎合を強いられているジャーナリズムにだけ動かされていた無知蒙昧の民衆のものでもない。

## 二十六

しかし、時局の足音は蒔岡一家と垣を隔てて住んで、その二児と悦子との交友から、家同志の交際に及んでいる、ドイツ人貿易商シュトルツ一家の動静を通じて、次第に伝わってくる。写実小説としての当然のこととして、関西大水害の名描写とともに、中巻の大きな部分を占めているこの事件の取り入れは、上巻のキリレンコ一家のこととともに、土地柄の描写といってしまえばそれまでだが、作者の意図の真意は、むしろ作者が早くから持っていた異国趣味（エキゾチシズム）や西洋好みと、その国際性の豊かさからくるものではないかと思われる。商人は世界に窓を開けて平和に生きなければならない人種である。私はここにもまた、近代の町人文学の臭いをかぎつけて、そのことについて少し述べてみたいと思う。

潤一郎の関東大震災による関西避難前の最後の居住地は横浜である。転居癖の強い彼は大正十一年十月には横浜も山手に引越すが、その前、十年九月には、小田原十字町から横浜も本牧の宮原に移って来る。その家は代表的なチャブ屋キヨ・ハウスの隣で、チャブ屋街では夜毎に西洋人相手の娼婦たちの歓楽がくり広げられる。そして潤一郎も派手な洋服の生活を送り、一家をあげてダンスに熱中する。「痴人の愛」（大13―14）をはじめとして、「本牧夜話」（大11）、「アヅエ・マリア」（大12）などの横浜を舞台にとっての西洋賛美のモダニズムの作品はこうして生まれたのだが、海こそは自由と生命と未知への憬れのシンボル、そして港とは世界に開かれたその最前線で、彼は耽美派の始祖ボードレールのように海へのあこがれを寄せる人であり、山間の孤高を愛せず、港町の喧騒を好む人だった。阪神間の岡本に居を構えるようになってからも、距離的の近さもあったろうが、一家の日常生活の行動圏は、大阪にはなくむしろ神戸にあったことは、昭和四年から五年までの一年半、助手としてその家に住み込んでいた高木治江の「谷崎家の思い出」（前出）などにも書き残されている。そして「細雪」の蒔岡一家の人々の生活圏もまた、これと同様である。

私は先日、神戸の北野町、今は異人館通りとして観光名所になっ

ている麻耶山麓のこの住宅街を見学してきた。個人や市によって買い取られ、手入れされて公開され、「英国館」「ラインの館」「うろこの家」「風見鶏の館」「白い異人館」などの愛称がつけられているものだけでも、屋内に入ってみれば、みな明治や大正期に外人技師によって設計されたもので、イギリスやドイツの貿易商の西洋式生活が偲ばれ、明るい南面のベランダの前方には世界の国々の船が集まっている神戸の港が見える。付近にはカトリックの教会も、日本には珍しい回教寺院もあり、坂道を元町通りの方へ降るトア・ロードの両側の商店街には、潤一郎好物の中華料理の名店も数多く、日本には珍しい東西のエキゾチシズムが漂っている。

むろん潤一郎の岡本の家も、「細雪」の蒔岡家もここよりは大阪寄りの六甲山麓の蘆屋にあったことで、このままそっくりの雰囲気ではない。私は四年前にこのあたりを探訪したことは前にも書いたが、彼が円本の印税景気で昭和三年に岡本梅ケ谷に生まれて初めて新築した豪邸は、いまでは二分割されて、支那式の一棟が付属する方が日本の人、奥の半分がアメリカ人の住居になっていた。「細雪」の舞台がこの家ではないことは前にも書いたが、しかしこのあたりでは、今でもこうやって西洋人が日本人と隣人として生活している。その後、谷崎は芦屋市宮川町に松子夫人と同棲の家を持ち、源氏物語の現代語訳をはじめるが、昭和十一年秋には神戸市住吉町の反高林の住吉川の西側にある「椅松庵」に転居して、ここで「細雪」に出てくるような家庭生活が営まれる。野村尚吾の「谷崎潤一郎風土と文学」（前出）によれば、松子夫人の末妹嶋川信子さんの話として、この隣家に実名シュルンボムというドイツ人の、シュトルツ一家に当たる人々が住んでいたのも事実そのままであるとのことである。

さて、「細雪」の蒔岡一家であるが、親戚は別として、深い交際を持つ家庭はこのドイツの貿易商一家だけである。ドイツ人としたところも事実そのままとはいえ、いかにも時節柄である。ドイツなら日本の当時の友邦だが、もしアメリカ人やイギリス人だとしたら、〝鬼畜米英〟と何事ぞと、これだけでも、当時の軍人は目を逆立てたろう。ところでシュトルツ一家の取り扱いだが、悦子とそこの娘のローゼマリーとの人種も家境も越えた毎日の仲のよい遊びぶり、そこに兄のペーターも加わって、みんな少年少女らしく愛らしいが、ヒルダ夫人はいかにも西洋婦人らしく理性的で、個人主義の節度を弁えた賢夫人に描かれる。しかしこのよい隣人も、やがて戦争が進んで夫の貿易の仕事の前途が悪化すると、悦子に横浜まで見送られ、ハンブルグへ去って行かなければならなくなる。

世界は一つ、隣人として各国人とも平和に親しく貿易し合って相交われるのに、これを引き裂いてしまう戦争というもの。……商人生まれの潤一郎の平和希求と戦争憎悪のそれとない表現なのではなかろうかと思う。

## 二十七

この作の下巻は前述のように、終戦後に「婦人公論」に連載されたものであるから、作者は言論弾圧からは自由になっている。「『細雪』回顧」（前出）で、この上・中巻執筆のころの当局による干渉の

ことを語った後、≪かう云ふ謂はゞ弾圧の中を、兎に角ほそ〴〵と「細雪」一巻を書きつゞけた次第であつたが、さう云つても私は、あの吹き捲くる嵐のやうな時勢に全く超然として自由に自己の天地に遊べたわけではない。そこにそこばくの製肘(せいちう)や影響を受けることはやはり免かれることが出来なかつた。たとへば、関西の上流中流の人々の生活の実相をそのまゝに写さうと思へば、時として「不倫」や「不道徳」な面にも亙らぬわけには行かなかつたのであるが、それを最初の構想のまゝにすゝめることはさすがに憚られたのであつた。…(中略)…今云ふやうに頽廃的な面が十分に書けず、綺麗ごとで済まさねばならぬやうなところがあつたにしても、それは戦争と平和の間に生れたこの小説に避け難い運命であつたと云へよう。≫

と述べているが、下巻では、もし書こうと思えば、若い日の谷崎好みのエロスも頽廃も存分に書けたわけである。しかし、全編の調和もあろう、また、写実小説としての性格もあろう、晩年の「鍵」(昭31)や「瘋癲老人日記」(昭36—37)などに見られる強調はないまでも、この巻の中ほどは妙子の頽廃と男を手玉にとる妖婦性のことに費される。しかもこれが監督者の幸子夫婦の目をごまかすために、表面を飾って真相を裏に隠すという状況で描かれるので、頽廃も悪もちらりちらりとその片鱗をのぞかせるだけで、この美しい小説の調子をみだすことがないように工夫されている。妙子が赤痢にかかって入院中のこと、それを見舞った幸子の目を驚かした肉体の衰えは、

≪日頃の不品行な行為の結果が、平素は巧みな化粧法で隠されてゐるのだけれども、かう云ふ時に肉体の衰へに乗じて、一種の暗い、淫猥とも云へば云へるやうな陰翳になつて顔や襟頸や手頸などを限取つてゐるのであつた。≫とか、≪それに、奇異なことは、あの近代娘らしいところが全然なくなつて、茶屋か料理屋の、——而も余り上等でない曖昧茶屋か何かの仲居、と云つたやうなところが出てゐた。≫とか描かれて、作中には描かれてはいないこれまでの奔放な性生活を暗示する。

また、やがて病気全快の後、幸子は妙子妊娠の事実に気づく。中巻の末尾に描かれた板倉の藪医者による手術失敗による急死の後、妙子が奥畑の啓坊とこっそり遊んでいるらしいことは、幸子たちもうすうす感づいてはいたことなのだが、子供の父が三好という妙子よりは年下の神戸のバアテンダーで、妙子からあの甲斐性なしの啓坊と別れるのには、これがよい機会だと言われてさらに驚かされる。啓坊は妙子の歓心を買うために、高価なコートや装身具を買ったり、彼女と遊んだりするために、兄に勘当される原因となった店の商品の宝石類などまで持ち出していたのも、結局は彼女に奔弄されていたわけである。

折から雪子には、降って湧いたように、先方から乗り気になっている御牧との縁談が持ち上がっており、妙子の妊娠の処理に幸子夫婦は頭を痛めるが、これは貞之助の図らいで、人目につきはじめる五ヵ月ごろから、女中のお春をつけて、有馬温泉の「花の坊」(温泉街も中心からずっと奥まった人目に遠い所にある旅館)へ生み落とすまで隠れ住ませることにして、世間への極秘を図る。……こんな出費に耐えられるのも、貞之助がこのごろ軍需工場に関係して金回りがいっそうよくなったからである。下巻は昭和十四年六月から十

六年四月までの出来事なので、作者はなんの遠慮もなく、また一言も批評めいたことばも挟まず、こういうブルジョア社会の頽廃と贅沢の生活の間へ、ただ事実として、出征兵士の見送りの行列も、初めての防空演習などの世相も、ドイツ軍がオランダ・ベルギー・ルクセンブルグへの進撃をしたダンケルクの悲劇やフランスの降伏などの欧洲情勢も、また十五年十一月の紀元二千六百年式典に湧く帝都のさまも、物語の進展に合わせ、それとの関連のもとに取り入れられる。

さて、作品には七・七禁止令とあるが、日本政府が贅沢禁止令を公布したのは、昭和十五年七月六日のこと、妙子の有馬温泉行も、雪子のいよいよの結婚相手の御牧との見合いも縁談の諸手順も、最初から何回も雪子の縁談を持ち込んで、今度はとうとう成功させる神戸のオリエンタルホテル近くに店を持つ馴染の美容院主の井谷の格づけのための渡米も、すべてこういう日本の政治無視、たとえば、政令によって手に入れにくくなった婚礼の色直しの衣裳なども、苦心惨憺して探してくるという調子で、すべて、旧習を重んじようとする、一流好みのブルジョア趣味の贅沢のうちに行われる。

ところで、先に蒔岡一族がこれまでにない良縁と思った橋寺医博に、雪子が断わられた原因は、妙子とは対照的に、肉身などへの深い情愛と献身の徳を持ちながら、物ごとを自主的に行えない古風で内気な彼女の性格にあったが、そこが気に入ったという御牧とはどんな人物かということの概略を述べてみる必要があろう。

維新の際に功労があった藤原氏の血をひく公卿華族で御牧という子爵があり、当主の広親はその子でかつては貴族院議員だったが、今は京都の別邸に隠棲している。その庶子の実というのが当の相手で、学習院を出て東大理科に在学したことがあるが、中退してフランスに行き、絵や料理などを研究したが長続きせず、アメリカで、あまり有名でない州立大学で航空学を修めてどうやら卒業、その後はアメリカ、メキシコ、南米などを放浪、一時送金がとだえた時はホテルのコックやボーイまでやり、八九年前帰朝して定職なくぶらぶらしていたところ、道楽半分に設計した友人の家が案外評判がよく、事務所も設け建築家になりかかっていたが、西洋近代趣味の横溢したその設計は贅沢で金がかかるので、事変の影響で注文が少なくなり、事務所も二年足らずで閉鎖して遊んでいるという、美男ではないが体は頑健で、雪子より十歳上の四十五歳の独身者で、「華胄の子弟によくある型の、交際上手な、話の面白い、趣味の広い人で、自ら芸術家を以て任じてゐる天成の呑気やさん」であるが、父から分けてもらった財産ももう残り少なくなっている状態の男である。その雪子に惹かれる理由というのが、欧米をめぐりつくしてきた後にきた、日本趣味へのノスタルジアのようなものから来ているのである。

雪子の義兄の銀行家の辰雄も計理士の貞之助も、その定職のないところに首をひねるが、家格にこだわり貴族に弱い大商人の娘の鶴子や幸子の女たちは、何よりも華族の子弟と縁続きになるということにころりと参り、御牧はまた恬淡の性格で、妙子のことなど知って知らぬふりをしているのではないかと思われるわけ知りぶり、父の子爵が関西方面へ家を買い与えてくれること、井谷にこの話を持ち込んだ出版社長の国嶋が、御牧の才能を見込んで将来の後援を約し

てくれることなどが決め手になって、井谷の短期の渡米間際のあわただしさの中に、幸子と雪子がそれを見送るための上京という口実のもとに、見合い、婚約とその縁談はとんとん拍子に進んでしまう。

そしてこの舞台には、例によって幸子たちのブルジョア好みの月並趣味がふんだんに折り込まれる。――彼女たちの泊る旅館は井谷の送別会が催される帝国ホテル（ライト氏の設計になる日本の代表的国際ホテル、現在は改築）で、御牧などとの面会はそのロビー、井谷の渡米の餞別品は服部（銀座四丁目角の時計塔で有名な服部時計店）の地下や御木本（人も知る御木本真珠王の銀座での店）で調え、髪のパーマネントはこれもわざわざ銀座の資生堂まで出向いてかける。そして小憩する喫茶店は、これらに近い所のコロンバン（当時の大通りの歩道近くにまで椅子を並べたたった一つのフランス式の本物のカフェ《コーヒー店》で、開店まもなくのころ、フランス好きの私たち大学生などもよく利用したシックな店）という具合である。そういえば、私にはその実体は分からないが、神戸で妙子が啓坊にラクダのオーバーコートを作らせたロン・シンという店も、橋寺との見合の花隈の菊水という料亭も、蒔岡一族が父母の年忌の法要を営む大阪心斉橋の播半という料亭も、みんな阪神での一流店なのだろうと思われる。……私が、こんな旅行ガイドブック式に店名を並べたてたのも、みんなこの作品の主要人物たちの、ひいては作者潤一郎の町人性の根本に触れる細目（ディテール）だろうと思ったからである。

しかし、雪子や貞之助一家三人が親戚の引合わせに招かれた、老子爵の京都嵯峨野の別邸の「聴雨庵」というのは、こういう定食メニュー式のものとは異なり、大堰川の遊覧船の発着所の前を過ぎて天竜寺の南門の方へ曲った所にあり、家は葛屋葺の平家建てで、そう広くはないが、座敷の正面に嵐山を取り入れた泉石の眺めはすばらしく、嵐山が庭つづきのように見える人里離れた仙境で、ここの茶屋で大阪の紳商園村家に嫁いでいる御牧の妹のお手前があってから、広間で〝柿伝〟あたりからの仕出しと思われる料理で夕食となるが、これも能役者のような顔をして、鼠の絹の襟巻をし、電気ストーブを背中に当てたり電気蒲団を敷いたりして、風邪をひかぬ用心をしながら、物静かに口を利く七十歳を過ぎた老子爵の御高話拝聴といった恰好で開かれる。これが〝上流貴族〟というものの、作者が考えた描写なのだろうと思われる。

家も前記園村氏所有の甲子園にある恰好の家作を子爵家が買い取って新夫婦に贈ることになり、御牧も国嶋の尽力で、アメリカ時代にとった航空学の大学の卒業証書が思わぬ役に立って、今度尼崎市郊外に工場が出来る東亜飛行機製作所に就職することに決まり、結婚式は子爵家の本邸も蒔岡本家の辰雄の家も東京にあるのだから、四月二十九日の天長節に東京で挙式、披露宴は帝国ホテルで両家の親戚知友の多数が出席、近ごろ派手な披露宴になることが予想される。妙子と三好の結婚も許されて、物語の表面は婦人雑誌連載物にふさわしい通俗小説的ハッピー・エンドに終わるわけであるが、作者潤一郎は、それをそのようにだけ終わらせないために、結末部分で次の二つの純文学的操作を行っている。

その一つは、生み月が近づいて、こっそり有馬温泉から神戸の産婦人科病院に移っていた妙子が、胎児が逆か児であったため、難産

の末、死産となってしまうことである。蘇生に力を尽した院長が「こんな可愛らしい、綺麗な赤ちゃんは見たことがありません、生きてをられたらどんなに美しい方になられたであらうと思ふと、一層残念でなりません、」といって詫びるが、妙子、幸子、お春、三好のみんなが泣く。この悲劇はこの世の美のもろさやはかなさの表現（「春琴抄」では佐助は己が目をつくことで観念の世界で永遠のものとした）であろう。第二は、結婚式に上京する雪子が、その数日前から下痢をはじめていたが、それがとうとう止まらずに、汽車に乗ってからもまだ続いていたというところで、この物語は終わることである。医学的に見れば、慣れぬ新生活に入っていくことに対する内気な雪子らしい不安からくる神経性下痢というところだろうが、これは人間の生体の汚ならしさへのリアリズム的認識とでもいうほうが強く印象され、すぐ前の箇所にある嬰児の死に顔のなめまかしいまでの透明の美と対照され、そして、生、死、結婚、とあわただしい人生流転の相の表現ともなっているのだろう。

## 二十八

さて、長々と続いたこの論の終わりにふさわしいものとして、私は、「細雪」の主人公論を据えておきたいと思う。

蒔岡家四姉妹のそれぞれの生活と運命とを描いた長編写実小説としてのこの作では、強いて特定の主人公を決める必要もなく、その英訳名が“THE MAKIOKA SISTERS”（E・G・サイデンステッカー訳）とあるように、蒔岡姉妹全部が主人公であるという見方も成り立つであろう。しかし、その構成とか、谷崎文学の本質とか、なんらかの観点からして、彼女たちの誰かを主人公と見立てる評論がこれまでも行れ、それには私の気づいた範囲で次の三説があるようである。第一のものは、伊藤整（新書判「谷崎潤一郎全集第二十四巻・細雪上巻」解説―前出）や日夏耿之介（昭24・2「『細雪』細評」）、山本健吉（「『細雪』の褒貶」前出）、三島由紀夫（昭45・4「新潮日本文学6谷崎潤一郎集」解説）らの雪子主人公説、次には折口信夫の「『細雪』の女」（前出）での幸子が〝真の立役〟との論、そして新しくは笠原伸夫（昭55・6「谷崎潤一郎―宿命のエロス」）の雪子、妙子の陰陽二主人公論とでもいうべきものがある。そして、どの論からも長女の鶴子は除かれている。これはその編中での活躍の分量からいっても、また、六人の子供を抱えて東京の貸家で世帯のやりくりに追われる生態からいっても、まずは自然主義文学中の人物で、谷崎文学の主人公とは縁遠い人物であろう。

ところで、この三説の分かれる理由であるが、結論から先に言えば、その評者たちのこの作へのアプローチの仕方の相違からくるものと思われる。まず、伊藤整に代表される雪子説は、全編が雪子の数次の見合い話が核となって進んでいく構成と、「蓼喰ふ虫」（昭3―4）あたりから始まる作者の日本趣味への傾斜や陰翳美の礼賛、それに伴っての理想の女性像の変貌などを考えに入れての論で、いちばん受け容れられやすい所論であろう。この作の題名も、初め「三寒四温」と考えられたが、後に美しい「細雪」と変わったあたり、「雪子」の「雪」にも通うものであり、作者の雪子の日本的な美や性格に寄せる関心の深さが窺えるからである。

次に折口説であるが、大阪の町中の生薬・雑貨商の家に生まれ育った氏が、その家族にいた母、叔母、祖母たちの古い大阪女の生き方から、この作の姉妹たちの生活やその描写に共感し、この小説の舞台回しの幸子を〝真の立役〟といい、時あって発露する彼女の美しい自我を、すべての読者は快く受け容れるに違いないと思うという。四姉妹それぞれの性格論をやり、雪子の新古典主義風の効果を持って書かれている性格は、もし、フランスあたりの国語に翻訳されたら、どんな効果を発揮するかは興味あるところだが、とし、幸子については、源氏物語の紫ノ上の性格を思いうかべ「谷崎さんの長い創作歴をふり返つても、かう言ふ正しくて、純で、博大な女性の心を書かれた場合を見た覚えはない。」と言い加え、雪子を知ることはそれは西洋人の中の小説の鬼に任せたらよいので、「幸子を表現することは、やはり、日本人の外には望まれぬことであらう。」とする。

笠原説はこの大著の副題の「宿命のエロス」が示すように、谷崎文学の第一番の本質ともいってよい、エロスという問題から、初期以来の一生の傑作を選び論じたものであるので、その点からいえば、この作で積極的エロスに生きるのは妙子だけ、雪子にも顔に周期的に現われる眼の縁のシミなど、陰のエロスが見られるとして、伊藤整説を逆の方面から見たものであり、どちらかといえば妙子主人公説に筆致は傾いているかのように受けとれる。しかしこの作は「痴人の愛」や「鍵」とは違う、写実的家庭小説なのであるから、その描写の分量とか全体に果たす役割、または作者がただ一人、その詳しい心理描写をするのは主として幸子だという点などから、私には賛同しかねる説である。

では、私自身はどうなるかとなるが、町人文学というアプローチで、谷崎文学を初期から検討してきて、ここで「細雪」を再吟味してみると、どうも折口氏とともに幸子主人公説を打ち出してみたくなったのである。

それを述べる手がかりとして、まず、『細雪』の褒貶」における山本健吉の次の言を引用させてもらおう。幸子が妙子の恋人であり、また命の恩人でもあったが「氏も素性もわからない丁稚上りの青年」である板倉と結婚するよりも、むしろ極道者で、甲斐性なしだが、船場の旧家の生れであり「同じ人種のやうな」奥畑と結婚するほうが「世間の手前は悪くない」と考え、板倉の死によってそれが自分に都合よく解決するのを喜ぶイン・ヒュウマンな気持を指摘した後、

≪結論として、彼女の「生活の美学」はなんら社会的・市民的・人間的な感情へ開かれる戸口を持つていない。谷崎氏という無上の生活至上主義者は、美の追求の果てに、このような閉鎖的な美学を完成した。氏がおのれの感性の方向に忠実であればあるほど、それは独善的・自己満足的なものとなり、ボン・グウたらんとしてかえつて、ボン・サンスを逸してしまう。氏はフロベールのごとく、描こうとする対象として幸子を俗物とはしなかつた。批判ではなく、賛美を、むしろそこに美の典型を想い描いた。だがその代償として作者自身が俗物と化した。高い代償である。≫

と書き、雪子だけが作者の実生活の手垢に汚されることなく、現実の彼岸に独立した造型性を獲得しているから、その薫りやかな清

楚な容姿によって一篇のヒロインであるとする。氏は幸子のエゴイスチックな心の動きだけを指摘するが、妹の雪子や妙子に対して、その将来の幸福を願う美しい姉妹愛の全編に溢れる描写を指摘することをしない。それよりも何よりも、潤一郎という享楽主義的エゴイストに向かって、この常識的な幸子夫人の心の中にエゴイズムの動きが見えたからといって、これにヒューマニスチックな批判を加えなかったからいけないというのだろうか。

私はこの幸子賛美とも解釈される〝俗物〟性のなかに、この作の町人文学としての本質を見、それゆえにこそ、先に述べた描写の中心ということを併せて、幸子主人公説を採りたい。妙子はその行動と考え方において非常識で不道徳、雪子はその性格と対人関係において非常識とも思われる変屈者、最愛の松子夫人の俤を写したかと思われる幸子の「孔雀が羽根をひろげたやうな」「若々しい明るい顔があたり一杯にひろがつて見えるような」、美しく、そして円満具足な姿こそ当時の潤一郎の理想的女人像ではなかったのだろうかと思う。

ここに山本氏の主張のために都合のよい、一つの芸術説を私は思い出す。夏目漱石が、「小生の芸術観及人生観の一局部を代表した小説」と同僚の畔柳芥舟に手紙（明39・8・7）で書き送った作品、「草枕」（明39）の「三」の中にある一言である。

《四角な世界から常識と名のつく、一角を磨滅して、三角のうちに住むのを芸術家と呼んでもよからう。》

だが、この漱石の文学を処女評論「『門』を評す」（明43）以来、「芸術一家言」（大9）などで批判しつづけた潤一郎が、その芸術のなかで、一人物の俗物性を容認したからといって咎めることは一方的である。四角の中の一角を取って、残る三角の中に住むものはなんだろうか。漱石の場合なら、さしずめその講演「文芸の哲学的基礎」（明40）で述べた真・善・美・壮の文芸家の四つの理想であろう。四角な世界を四角なままで捉えようとした写実小説の「細雪」では、作者は彼の他の多くの作品のように、常識の一角を磨滅しなかったけれども、残る三角の中には真と美があり、善と壮との代りに悪と怯と醜もあり、また非常識も描かれる。より広く、より公平な人生把握の態度とはいえないだろうか。

ここに潤一郎や私のために、強力な援軍を送ってくれる評論として永井荷風の「細雪妄評」（昭22・11）や日夏耿之介の「『細雪』細評」（前出）がある。潤一郎贔屓の荷風が「細雪の作風は純然として又整然として客観の範囲を厳守してゐる。」といい、田山花袋の「蒲団」などもこれに比すると、客観的態度に欠けるところがあり、「細雪」の客観的なことは、フローベルの「ボワリイ夫人」「感情教育」の二大作に比するも遜色がないと言ったことは、褒めすぎの疑いを招きかねないが、耿之介はまず、「わたくしは、谷崎文学の愛読者ではないのである。」と断った後、上・中・下巻に分かって独自の批評を試みている。「上巻細評」の「一」で、人間五十代にかかると、もはや生わかい人が生わかい者相手に、人生のジグザグを諸欲の角度から、誇張するという自覚なしに、しかも自然に誇張法を用いざるをえないレトリックで書き下した浮世絵巻に、人生の素人らしい興味をそそぐには、余りに人生の局面を知りつくした思い出により、もうたくさんだと言いたくなる、所詮、文学は青年

のものであるのか、とした後で、

≪更に併し、爰に二つの特色が小説の構成の上に保たれてゐるならば、読む者にとつてその作者が愛読作者ではなくとも、作者は老者でも青年でも、その小説に嚮つて老若読者からつよい興味が濺ぎ下されることがありうる。その一つは事象純客観の態度を極度にとるさがのもので、その二は執拗にして詳密な心理描写である。≫

と言い、その一をとるものは明治三十年代末の自然派抬頭のころからであり、その二は尾崎紅葉の「多情多恨」（明29）のころからであるとし、しかし自然派の客観にも情欲のうごきが連帯的精神の貞潔を破ろうとして衝き進むというような場合の描写に、道義的反省の時間や事実に対して全く初めから注目を払わなすぎる、などの癖があるとし、次に英・仏・露の近代小説のリアリズムの筆法にならって新聞小説を書きはじめた晩年の漱石文学に及ぶ。

≪五十歳で死んだ漱石にも、その彼ユニイクの譜代の客観手法はつひに確定しなかつた。尤も晩年の諸作品はやうやく純客観の域に薄つたが、惜いことに、作者が取り上げてゐる人生諸慾と、作者が撫摩する現在の文人的澄深、東洋的超詣を欲する心境とにどうすることの出来ぬひらきがあり、譬へば陰萎病者が卑俚談を聞かされて顔をしかめるやうなしかめ面で諸慾の人生に面してゐる見えがあつたから、…（中略）…完全な人間像描出に十分効を奏するに至らなかつた。≫とし、「二」では、

≪『細雪』上巻の発端を読む人は、かういふ漱石物の持つ遺憾の点はない、塵労に疲れ果てた今人の額にも、尚且冷んやり爽やかにくる客観の快感のタッチをまづ感じるであらう。

之れはこの作者の小説的発展の高みを譚るものである。この高みは、客観心状の澄み極まれる一つの高さであつて、若し発端の条りの度合が全篇にわたつてつづいたら、世界的名品ともなつたらうが、遺憾ながらそれは発端と、あとは処々に砂金の如くあらはれてゐるにとどまつてゐる。それでも端緒に見ゆるこの澄明は、今文学には稀有の清冽であつて、自然派が秋声の『縮図』で高まつた高みを人はよく言ふが、秋声のそれは『細雪』発端の条りには遠く及ばない。役者がちがふ。その秋声愛慾小説は、中産紳士の愛読本漱石の晩年小説よりも卓れてゐる。≫

といい、次に漱石の「明暗」（大5）の一節の描写などを例示して、「がつしりと描く手堅さ以上の、衝きはなした生客観の爽やかさといふものがない。」と評し、

≪客観文学の強みは、この精神に来る神経的爽快が極所にあつて、これは人生の波の蜘蛛手なす起伏に翻弄せられてゐる日常生活的人間が欲する、単なる人生遁避でない。山に入る文学でない。市に在つて市を客観する快感による市塵解脱である。この解脱の刹那は、芸術による救ひのやうなものを感得することができる。≫

と、客観芸術の功徳に説き及ぶ。そして「中巻細評」では先にあげた山本氏が攻撃した幸子の板倉の死に対する心情を「人の死を希ふではないが、正直のところ有難いといふ気持ちがさきであつたとなしてゐるところもよろしい。」と褒めている。これは直接的に前述の山本氏の所論に対する駁論となるものではないだろう。ただ、この「細雪」は、主としてその初めの部分についてではあるが、へんな批判も賛美もない爽やかな純客観小説だからすぐれているとい

う、荷風以外にも、もう一人の文芸の練達者の読み方もあるという例として長文を拝借したのである。

しかし、徳田秋声もどこかで言っていたと思うが、どんな客観小説とはいえ、その題材や人物の選択においてすでに作者の好みという主観は免れないものであるから、そういう意味ではこれまでも私が指摘してきたように、「細雪」はまさに作者の町人性という俗物の文学である。しかし、私は故谷崎潤一郎氏に代わって山本氏や故夏目漱石氏に反問する。〝非俗物〟や〝道徳家〟がその文学を持つと同様の権利で、〝俗物〟や〝常識家〟がその文学を持っては悪いという理屈があるのだろうかと。また、作の高下は、漱石先生なら作者の人格の高下と言うところだろうが、私はそれはむしろ芸術家としての精進や芸の高下からくる、その表現の巧拙によるのではないだろうかと思うのだが、……と。

（完）

〈昭和五十六年十月〉